

資料

福島安正大將 来る

大正四年の「佐伯自治新聞」から

集録録分 羽 柴 弘

千軍万馬の間を馳駆したる福島大將の心身は、平素の注意修練と相俟ちて、其の顔貌も剛健の相に満ちて、冬輩其の赫顔を見て、一種痛快と尊敬との念を禁ずる能はざるなり。

(大正四年一月十七日 記事)

と筆を起して、明治二十六年の冬、軍騎シベリア横断の世奉をなしたとけられた福島安正大將(當時は中佐)を当地に迎えて、新聞記事、河南卓と主幹としていた週刊紙「佐伯自治新聞」(後の佐伯新聞)に、以下数日ほど書いて記事かかっている。當時のことを昨日のように思い起こしなつかしく七十才前後の老人は多い。以下順を追って、同新聞の記事を紹介しよう。

福島 將軍 来る

颯爽たる英姿、矍鑠たる風貌

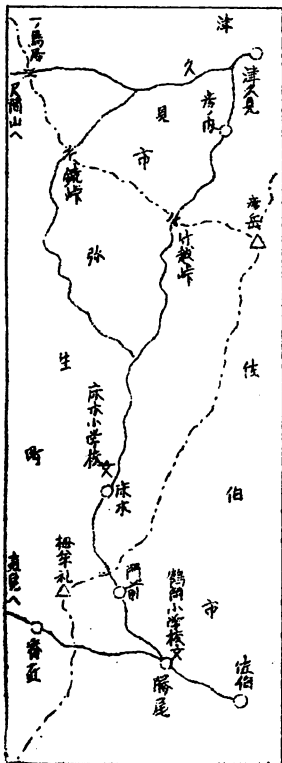
全国騎馬旅行中の陸軍大將福島安正閣下は、去る十二日大分寮白井に一泊し、翌十三日白井存察津久見を経て佐伯所に向られたので、当所在郷軍人会より日総代として野村中尉、佐藤少尉騎馬にて考岳の麓まで出迎えたが、大將の一行は零時半頃考を下り、一時二十分過ぎ明治村床木小学校に到着された。

丁度考の山路を通過する頃日寒風凛烈氷を刺し、雪さへちらほら降り出でて谷間の流れば氷柱と化し、

隨行の人々も大將のお身のしを氣遣はれたそうだが、大將は少しも寒むそうな気色もせず、重安堂々馬を早められたには、出迎の人々もいたく感激したそう

だ。同小学校に於て中食を終えられた後、八幡、西上浦、明治村在郷軍人に一場の訓示を乞え、引続き小字児童並に有志の爲めに有益なる精神講話あり、それより同校々庭に記念の松を植樹せられた記念撮影後二時四十五分万歳の声に送られて床木を發したが、同所まで出迎之に未だ居つた運動シヤツ姿の鶴岡小学校児童を見て、「夫れでなくてはい分ぬ」と云つて嘆賞されたそうだ。又鶴岡村橋尾に着せられた途中、土地の状況やら産物米価、神社仏閣、榊神社跡等に關し種々質問せられたと云ふ事である。

橋尾にて鶴岡小学校生徒及有志の出迎を受け、切川通りにて郡会議員、村会議員及多数有志に迎えられ、愈々佐伯所に進入されたが、郵便局前には在郷軍人会分会の代表者が分會旗を押し立てて整列し、大車前には群衆山をなして今も遅しと待ち受けて居る迎き、大將日一々敬礼し乍ら静々其前を通過し、午後四時五分、中学校、女学校、小学校職員生徒等の増列歓迎を受けて佐伯小学校着、応接室に入りて小懇、官吏有志等の伺候を受け、それ



より階上講堂に集合せる佐伯、鶴岡、大入島、上下堅田、木立、東西中浦其他の在郷軍人分會員及び佐伯及び近村小學校五年以下の児童に對し、夫々簡潔明解なる講話を爲し、終りて同校玄関の右側に記念の松を植樹せられ、直ちに腕車にて佐伯中學校に向い、四時三十五分より同校生徒控室に於て中學校、女學校及び尋常六年以上の小學校六年以上の小學生徒に對し、有益にして興味ある一場の講話をされ、暫時校長室にて休憩の上、旅館梅屋に投宿され、

入浴後晚餐を終つたのが既に七時近くであつたが、佐伯の魚の美味なると、料理の塩梅の好いのが、大層お氣に叶つたさうだ。

食後有志の揮毫を請ふ者百五十名程あつたが、時間其の他の都合もある事として其中四十枚許り揮毫されたさうである。

同旅館では何か珍らしいものをささげめし度いと云ふので、色紙餅を捲えてお膳に上せたが、後程と云ふ事であつたから、揮毫後木立村在郷軍人会から寄贈になつた餅と共に下膳めした所、大層お喜びになり、一部分を小包にして東京の方へ送られたと云ふ事だ。

其夜九時お床に就き、翌朝七時半起床、九時旅舎を出発され、在郷軍人團及多教育志に見送られて、吹雪の中を威風堂々直見村へ向はれた。

(大正四年一月十七日揚載)

同日の「寸馬豆人」欄

△フク島だから吹いた訳でもあるまいが、騎馬將軍が本陣を訪問された十三日は、朝から北風が吹いた吹いた。

△それが昼頃から吹雪になつて出迎人几ブルブルと慄へて居た。

△之が福島將軍でなくて信濃大臣か茶藤藏員かぞの出入へであつたら如何だらう、田舎なりの役目位に心得て三々五々に退却、或るは権根唯三人へて女所が落ちたらう。

△併し何と云つても相手が世界を馬蹄に掛けた自衛隊願先いて待待なる六十三才の福島鬼將軍と来ていゝるので、寒いので冷たいのと言はれた義理ぢやない、日頃ぬぬ温湯で顔を洗ふ日本男子も、炬燵と親類の武俠國民が、襟巻を外してドヤ／＼と押し出して行つたのは蓋し近來の痛快事ぢや。

△願はくば將軍閣下、凛烈たる西比利亞風をお土産に持つて柝々御訪ね下されとお頼みして置く所だつた。將軍出発の日には珍らしい積雪、雪は豊年の貢、純潔の色、尚泥も選挙の貢上は色々暗示と与えられた様にも思はれるではないか。

同日の「人事消息」欄

△福島安正(陸軍大將) 去十三日未伯 梅屋旅館へ投宿、翌十四日午前九時出発、直見村園へ宿泊せし。

村落に於ける 福島 大將

直見村通信

正月十四日午後零時過、福島大將直見村に入る。直見小學校の前では、直見在郷軍人團、直見校児童其他一般有志整列して之を迎え、大將は馬上懇々と答礼しつつ過ぎたが、児童は大將の方歳を三唱し、其後馳足して大將に従ふた。

午後一時大將は専念寺の講演会場に臨み、直川両村の在御軍人團、及び直見川原水両校児童及一般男女の爲に一場の講義を談及た。

講演後、大將は豫め宿所に定められてあつた上直見村字中津留なる後藤伊吉氏方に到り、直ちに和服に着換へられた。そして「誠に立派な家へ来た」と云ひ、次いで又「何も手数を掛けないでもよい」と。

かくて、其家の老父冥土の土産にとて大將の前に挨拶に出づるや大將は「其の何才なるや」を懇ろに尋ねられた。「八十を二つ切れた」との答に、大將は「年よりは若い」と言つていたばら左さうである。

それより中食、休憩、入浴、有志の伺候を受け、夕餉後一時間半許り揮毫して九時に就床された。聞くに襦袢一枚に帯を締められて丸寝であつたそうだ。「灯はつけなくとよい。枕元はマツキと提灯とを用意して呉れ」と云つて、灯も消して休まれた。

御飯は村の佐長の家で調理、何と盛物が良いと褒めて食べられた。酒は飲まない。餅を小川(は本近村小川)からの蕎麦を喜ばれた。それから大変に熱いお茶を上り、大変に優しいお方であつたと家の者も喜んでゐた。

翌朝六時起床、食後又揮毫、九時前中津留を辞して征途に着かる。風霜凜として万里遠征を思はしむるに、仁田原の溪流に沿ひて岸の上から操り原に出で、十時四十分頃大野郡大原を過ぎられた。(苺栗子報)

以上二月二十日の同叙

人の簿

同叙二月二十一日の記事

△福島大將が今回の単騎旅行中、最も感慨を惹いた事として、門司に於て新聞記者に語つた話の中に、

△峻険な鏡峠へ之は前峠の誤りである(う)を將に降らんとする時、數十の小學生徒が里余の峻道を物ともせず、餅を携へて迎へて呉れた事と、
△峠を降つて運動シヤツの鶴岡小學生徒隊に迎へられた事を特に言つたさうだ。

△大將が直見から留守宅に宛てて出した葉書に、「山峻険にして騎行す可らず、馬を曳いて鏡峠に到れば、数十の小學生徒、里余の峻道を踏み、餅を携へて予を迎ふるに会す。至情人をして泣かしむ」といふ様な意味の文句が書いてあつたと云ふ。
△軍人の書翰は一帯に簡潔で余情に富むものである。(以上)

(附)

福島將軍「大鼓征伐詩集」の中に次のような漢詩が載つてゐる。併せてここに掲げよう。

鏡 嶺 福島安正

鏡嶺鏡道一徑路 (鏡嶺、わがわがに響き一徑の路)

峻阪衝胸騎馬難 (峻阪、峻険の坂、衝胸、胸を突く、騎馬、馬を乗る)

朔風凜冽雪紛乱 (朔風、北風、凜冽、冷たい、雪紛乱、雪が乱れる)

溪流飛沫迸激湍 (溪流、川の流れ、飛沫、しぶき、迸激湍、激しく進む)

偶見百餘童男女 (偶見、たまに、百餘、百あまり、童男女、子供たち)

踏險末迎叙悃歎 (踏險、険しい道を、末、ついに、迎叙、迎へて叙す、悃歎、感慨を述べ)

質実寡言情却厚 (質実、質素で実直、寡言、少言、情却、情を却る、厚、厚く)

懇贈黑貂幾餼困 (懇贈、懇々と贈る、黑貂、黒い貂の皮、幾餼、いくばく、困、困窮)

(注)普通鏡峠といふが鏡嶺としかがみぬまと振がな加してある。